群星光芒

GUNSEI-KOUBOU

近代医人の群像

1. 杉田玄白

連載小説―❶

群星光芒

GUNSEI-KOUBOU

近代医人の群像

作◆篠田達明

杉田玄白(1)

大通りのはるかむこうに土煙(つちけむり)があがった。杉田翼(すぎたたすく)は遠目が利く。そこに栗毛の裸馬が1頭、疾駆してくるのがみえた。

「乗り手がいないぞ。振り落とされたのか」

翼はかたわらにいた仲間の小杉在寛(こすぎありひろ)に声をかけた。

「おお、あれは暴れ馬だ」

小杉も丸顔の大きな目をおしひろげて叫んだ。

ここ芝口橋の大通りには毎年江戸へ参府するオランダ甲比丹(かぴたん)の行列をひと目見ようと見物人が人垣をつくってひしめいていた。

今年17歳になる小浜藩(おばま)医の息子杉田翼と2歳年長で藩医見習の小杉在寛も蘭人定宿の長崎屋へむかう洋装礼服の甲比丹一行を見物にきたのだ。

裸馬は蹄(ひづめ)の音をひびかせて狂ったように暴走してきた。口から泡を吹き、眼が血走っている。

「危ないっ」

翼は群集に突き飛ばされて路上につんのめった。目の前に逃げまどう1台の駕籠があった。駕籠舁(かき)きたちが長柄(ながえ)を回して懸命に道脇へどけようとする。それより早く馬は猛烈な勢いで駕籠に突っ込んできた。

馬はぶきみな音を立てて長柄にぶつかり、駕籠をなぎ倒し、なおも数間走ってオランダ行列の直前に地響きを立てて倒れた。四肢をふるわせ、馬糞を垂れて荒い息をついている。

横倒しになった駕籠から老人が這いずり出てきた。額がざっくり割れている。商家のご隠居と思われ、手代(てだい)が懸命に抱きおこしている。小柄な翼は身軽ですばしっこい。咄嗟(とっさ)に老人の下(もと)へ駆け寄り、懐から金巾(かなきん)を取り出して額の出血を抑えた。そこへオランダ行列の従者たちが駆けつけてきた。

大通りの両脇には呉服屋、漆器屋、鋳掛(いかけ)屋、油屋、羅宇(らう)屋といった大小の店や問屋がのれんをさげて軒(のき)を並べる。

翼は手代や従者たちと老人を抱えて眼前の唐傘(からかさ)屋へ連れ込んだ。警固の役人たちがやってきて唐傘屋の店先にむらがる野次馬をしきりに追い立てる。肥えて汗かきの小杉は右往左往する群集にまぎれたのか姿が見あたらない。

「こちらへ」

と店の者にいわれ、老人を天窓のある奥の板敷部屋へ運びいれた。周囲に油紙の匂いが漂う雨傘や日傘が広げてあった。

店の女中が板間に敷布をしいたので、苦痛に顔をゆがめる老人をそこへ寝かせた。

「ご隠居さま、大丈夫ですか」

と手代が心配そうにのぞきこんだ。

翼は女中に焼酎をもってくるように頼み、

運ばれた焼酎を金巾に浸して額の傷に当てがい腰の手拭いで鉢巻をした。

そこへ1人のオランダ人が黒鞄を抱えた若い男を従えてあらわれた。翼が初めて見る雲を突くような大男である。異人の髪油と汗の匂いがつんと鼻をついた。

「蘭医さまと大通詞さまじゃ」

土間に立つ従者の1人がそういい、異人と若い男に頭をさげた。翼と手代が場所を空けるとかれらはすぐさま怪我人の両脇に身をかがめて座った。

大通詞はぐったりと横たわる老人の衣服を手早くぬがせ、翼が巻いた鉢巻を外した。オランダ医は怪我人の額の傷を調べ、左肘にも割創があるのを認めると焼酎で出血部位を拭い、右の上腕を太紐で縛った。

大通詞は翼と手代に、

「蘭医が傷の縫い取りをなさる。おぬしらはしばらくご老体を抑えてくれ」

と頼んだ。翼と手代は怪我人のからだをしっかと支えた。

大通詞は黒鞄の中から持針器と針糸を取り出してオランダ医に渡す。医師はすぐに額の傷の縫合をする。ついで肘の傷を縫いあげた。針さばきといい糸むすびといい、あざやかな早技だった。オランダ医が腕の太紐をほどき、出血が止まっているのを確かめると大通詞は鞄を探りサラシの包帯を取り出して額と肘に巻きつけた。

医師は老人の右胸の上辺を指しながら大通詞に何ごとか囁いた。うなずいた大通詞は、翼と手代にむかっていった。

「右の鎖骨が折れて肩がすぼまっている。ご老体に座ってもらい、おぬしらはそれぞれ左右の肘を曲げて保ってほしい」

翼たちが老人を起こす間に大通詞は手早くサラシを巻いて、さしわたし4、5寸のわっかを2本つくった。

医師は座位になった老人の背後に回る。それから両肩をもち、両肩甲部を強く後ろに引いた。ごりっ、と音がしてそれまで苦痛に耐えていた老人の表情が急に和んだ。折れた鎖骨がまっすぐに整復されたのだ。

ただちに大通詞が医師にわっかを渡す。医師はわっかを両肩にかけ、これを後方に引いて肩から背中に洋数字の8を描くように両端を紐できつく縛った。一種のたすきがけのような骨折の固定だった。

「おかげで楽になり申した」

老人はオランダ医と大通詞に頭をさげて礼を述べた。老人は治療の間、気丈にも歯を食いしばって一言も痛みを訴えなかった。

オランダ医と大通詞の果断な処置に翼は舌を巻いた。縫合に用いる糸や器具、傷口の縫い方は外科医である父のそれとはあまりに異なっていた。かれらの練達の医術が目に焼きついた。

オランダ医は女中が用意した金盥の湯と手拭いで手指の血を拭い取ると立ち上がった。

大通詞も手術器具を鞄におさめてから、「あとはおぬしらにまかせる」といい、オランダ医のあとにつづく。翼はその場に手をついて大通詞に声をかけた。

「あざやかなご処置、とくと拝見いたしました。わたしは小浜藩医杉田甫仙の倅杉田翼と申す若輩。さしつかえなくば、お名前をおきかせください」

大通詞はふりかえり、

「手前の名は吉雄幸左衛門。こちらはオランダ商館の外科医クーレルさまじゃ」

そう告げると2人はなにごともなかったかのように店を出ていった。土間で待っていた行列の従者たちがあわててあとを追う。

老人と手代はかれらの後ろ姿にむかって深々と頭をさげた。